

「官兵衛の里・西脇市」



西脇市「官兵衛の里」推進協議会

～「官兵衛の里・西脇市」の主張のために～

戦国の智将・黒田官兵衛の生まれは播磨国姫路であるというのは良く知られていますが、しかし、それ以前の黒田家の歴史については、「良くわからない。」というのが事実のようです。

通説では近江源氏佐々木氏の一族で、備前国福岡に渡り、その後姫路に移り住んだとされていますが、伝承の域を出ないようです。

黒田家自身もそのことを自覚していたようで、江戸時代に何度も先祖調査をし、黒田家の公式な記録である「黒田家譜」を完成させましたが、その後も黒田家の墓所発見を機に、家臣が播磨の各地を訪ね調査を行い、文政12（1829）年には、多可郡黒田村（現西脇市黒田庄町黒田）が黒田家の故郷なのかもしれないという伝承を「播磨古事」としてまとめました。

時は流れ、平成23（2011）年に、この「播磨古事」や、黒田庄町黒田にある荘厳寺所蔵の「黒田家略系図」が公表されたことにより、黒田家の西脇市出自説がにわかに注目をあびることとなりました。

こうした中、地元住民をはじめ、経済団体や観光関連団体、また企業等が協力・連携し、2014年のNHK大河ドラマ「軍師官兵衛」の放映にあわせ、西脇市を官兵衛ゆかりの地として広く内外にPRしていこうと組織を立ち上げ活動に取り組んでいくことになりました。

風雲急を告げ、生き馬の目を抜く戦国の世において、黒田官兵衛は生涯五十数度の合戦で一度も負けを知らなかったといわれる戦の天才であり、この男がいなければ秀吉の天下はなかったと言わしめた名軍師です。

一方では、和歌や茶の湯を愛した文化人、そして敬虔なキリシタンであり、当時の武将としては珍しく、生涯一人の妻と添い遂げた律儀な人物です。このように優れた才能に恵まれた官兵衛に思いを馳せるとき、わたしたちの故郷が彼の故郷でもあったと思うと、ふつふつと誇らしさが湧き上がってきます。

歴史には謎が多く、それが大きなロマンでもありません。近江発祥というこれまでの通説を否定するのではなく、官兵衛が生まれた里としての伝承が伝わる西脇市においても、黒田官兵衛を素晴らしい地域資源と捉え、また郷土の偉大な先人として誇りを持ち、ふるさとづくりを進めています。

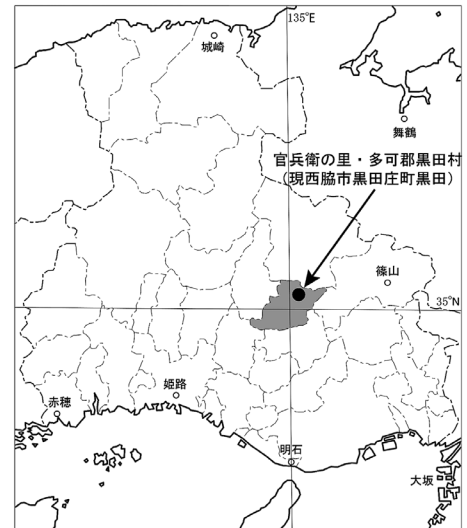


1 黒田氏及び黒田官兵衛の多可郡黒田村出自説の経緯

秀吉に天下を取らせた稀代の軍師として知られる黒田官兵衛を輩出した黒田氏は、近江国出自というのが通説ではあるが、確たる証拠はなく、後世に福岡藩黒田家の事業として貝原益軒によって編纂された『黒田家譜』によるところが大きい。また、姫路城で生まれたとされる黒田官兵衛^{よしとか}孝隆についても、その出生地について確認できる史料は存在しない。

ところが、江戸時代に編纂された播磨の地誌類や記録類には、「黒田官兵衛やその父は多可郡黒田村の生まれ」とするものが多数あり、江戸時代の播磨では、黒田氏や黒田官兵衛は播磨国多可郡黒田村の出身と広く認識されていたようである。また、荘厳寺に所蔵されてきた「黒田家略系図」が公表されるにおよび黒田官兵衛や黒田氏の多可郡黒田村出自説が脚光を浴びてきている。

黒田氏及び黒田官兵衛の多可郡黒田村出自説については、昭和 47 (1972) 年に刊行された『黒田庄町史』で、荘厳寺所蔵系図の写しと思われる地区所蔵の「黒田氏系図」を用いて、発表されたが、当時は注目されることがなかった。平成 15 (2003) 年、姫路市文化振興財団 (当時) が、江戸時代に編纂された播磨の地誌類や地区所蔵の「黒田氏系図」などを紹介して、黒田家の播磨出自の可能性を指摘。次いで、平成 23 (2011) 年には、姫路市文学館が「黒田官兵衛の



官兵衛の里・多可郡黒田村の位置
(現兵庫県西脇市黒田庄町黒田)

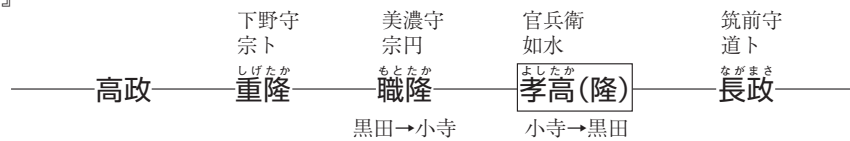


黒田官兵衛の里・多可郡黒田村の景観

魅力展」で、莊嚴寺所蔵の「莊嚴寺本黒田家略系図」を紹介した。同年、播磨黒田氏研究会は、福岡藩が姫路で行った黒田職隆・重隆の墓所の調査と修復及び播磨時代の黒田家の調査記録で、播磨学研究所が翻刻紹介した『播磨古事』や「莊嚴寺本黒田家略系図」の研究を進め、黒田氏及び黒田官兵衛の多可郡黒田村出自説を補強して発表するに至った。

播磨黒田氏研究会の研究は、同研究会によって積極的にPRされたこと、また、多可郡黒田村出自説が黒田官兵衛を取り扱った書籍にも紹介されたこと、さらに、平成26(2014)年放送予定のNHK大河ドラマが、「軍師官兵衛」に決定したこともあって、関係者が注目するところとなり、地元黒田地区を中心に「北播磨黒田官兵衛生誕地の会」が結成され、多可郡黒田村出自説を自己主張していくことになった。

『黒田家譜』



『莊嚴寺本黒田家略系図』

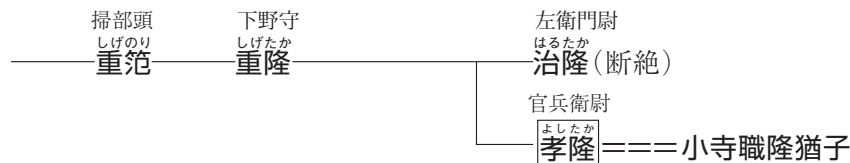


表 一般系図と莊嚴寺本系図

2 黒田孝隆（官兵衛）を多可郡黒田村生まれとする史料

(1) 『播磨古事』（史料1）

- ① 「小寺官兵衛祐隆（孝隆）は、播磨国多可郡黒田村の産なり。その村名にちなんで、後に黒田氏に改めて、姫路城を相続して居城する」とある。
- ② 天明4(1784)年11月に黒田村及び莊嚴寺を調査し、「多田の古城は、筑前国主の御先祖の城跡」、「多田の城が攻められたときに、姫路へ脱出した若君が後の黒田家の太祖（官兵衛）である」などの当時の黒田村の伝承を村の見取り図とともに記録している。
- ③ 「播磨の諸記録によれば、孝隆（官兵衛）公は、(小寺)美濃守職隆公の猶子と書いている。また、姫路の心光寺にある長政公が奉納した3対の位牌が、孝隆公、重隆公、松譽禪尼であることや、孝隆公の母の名前は、於松、あるいは松の前という黒田村の伝承があることから、孝隆公の父は、重隆公で、(小寺)職隆公の猶子となったことが考えられるが、福岡藩黒田家には、このような記録や言い伝えもないことから、今後、調査する必要がある。」と

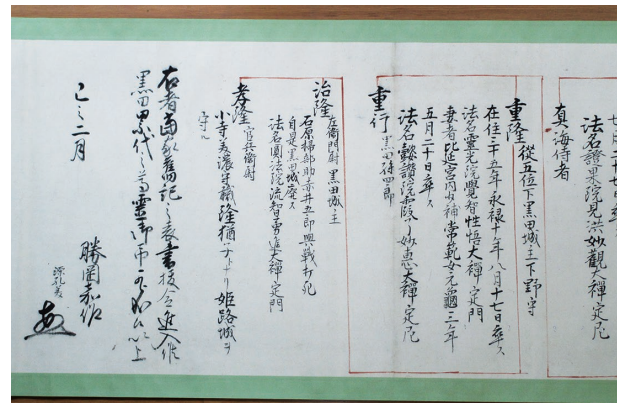
記し、官兵衛の父は、職隆ではなく、祖父と言われている重隆が父で、職隆は小寺氏であつて、重隆の子として産まれた官兵衛は、小寺職隆の猶子となつたのではないか、という疑問を述べている。この点、「莊嚴寺本黒田家略系図」では、孝隆は重隆の子として生まれ、小寺職隆の猶子となつて姫路へ移つたと記されている。

※ 『播磨古事』は、天明4(1784)年の官兵衛の父職隆の墓所発見と廟所の建設、官兵衛の祖父重隆廟所の整備などの記録と、播磨における黒田氏に係る調査や伝承をまとめたもので、文政12(1829)年に著された。平成18(2006)年に所有者から福岡市博物館に寄贈され、播磨学研究所が全編を翻刻し平成24(2012)年に『播磨学紀要第16号』で公表され、江戸時代後期の福岡藩と姫路藩の交流を知ることができる貴重な史料となっている。

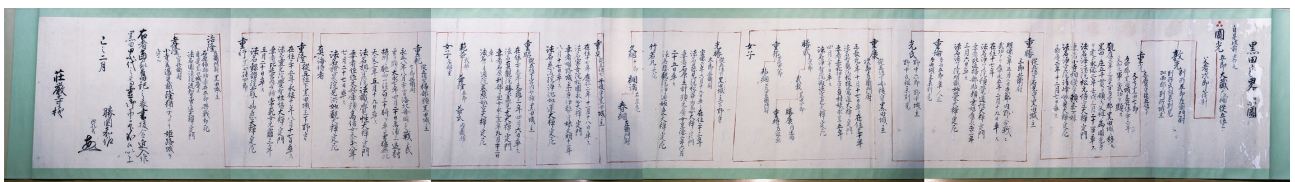
(2) 「莊嚴寺本黒田家略系図」(史料2)

文化6(1809)年ごろに莊嚴寺に奉納された系図で、黒田氏の発生から滅亡までの歴代が記されている。それによると、黒田氏は多可郡黒田村の出自で、代々黒田城の城主を継ぎ、重隆の子として産まれた孝隆官兵衛尉が小寺職隆の猶子となつて姫路城を守つたと記されている。

また、官兵衛の母は、通説では、黒田職隆の妻である明石氏の娘であるが、この系図では、黒田重隆の妻となつた黒田村の南に位置する比延山城主比延氏の娘と記している。系図によると、黒田氏と比延氏の間には、代々婚姻関係があり、現在、地元に住み、比延氏末裔を名乗る一族でも、系図とともに、黒田家との婚姻関係があつたことを言い伝えている。



「莊嚴寺本黒田家略系図」(部分)



「莊嚴寺本黒田家略系図」(全幅)

※ 「莊嚴寺本黒田家略系図」の表題は「黒田家略系図」で、黒田氏と姻戚関係にあると伝える家系の子孫が、黒田氏の菩提を弔うために文化6(1809)年ごろに莊嚴寺へ奉納したもの。平成23(2011)年、姫路市文学館が「黒田官兵衛の魅力展」で、この系図を紹介して脚光を浴び、播磨黒田史研究会によって調査研究が進められた。なお、冒頭と末尾を欠くが、この系図の写しと考えられる「黒田氏系図」が莊嚴寺の地元・黒田に残されている。

(3) 『播陽古城記』(史料3)

・多田城(『播磨鑑』では多田構居)

「城主は黒田下野守重隆、嫡子官兵衛孝隆、小寺美濃守職隆の嫡子(嗣子?)となり、姫路城を守る」と記されている。

※ 『播陽古城記』は、江戸時代中期～後期にかけて数多く編纂された古城記・戦記・地誌類のひとつで、詳しい編纂年代は不明である。なお、他の古城記にも同様の記載がある。

3 黒田職隆や黒田重隆、黒田氏が多可郡黒田村の出身、又は領していたとする史料

(1) 『播磨鑑』(史料4)

① 飾東郡「姫路御城主御代々始記」に「黒田下野守重隆は、始めは備前に住み、中頃に多可郡黒田村に住み、後に姫路に移り、57歳で死去」とある。

② 飾東郡「飾東郡古城跡並構居」所載【國府城】の説明に、「天正8(1580)年の頃は、小寺孝隆(黒田官兵衛)の居城。先祖は宇多源氏の後胤黒田判官備前守高満の末葉下野守重隆。故あって、当国多可郡黒田村に住む。嫡子の官兵衛孝隆は、姫路城主美濃守職隆(小寺職隆)の猶子となって姫路を守る」とある。

③ 『播磨鑑』附録「人物門」【武之部】所載の黒田家の説明に、「黒田家は多可郡黒田村の産という。九州の大家なり」とある。

※ 『播磨鑑』は、印南郡平津村の医者・歴算家であった平野庸修の著。播磨のあらゆる文物について、その内容から、当時収集できたであろう播磨に関する資料のほとんどを参考して、考註を加えて執筆している。享保4(1719)年ごろから編纂が始まり、宝暦12(1762)年ごろに成立したと考えられている。

(2) 『播陽古城記』(前出史料3)

黒田城「城主は黒田下野守重隆、秀吉に属し後徳川家康の代に至り慶長五年筑前福岡城主に封ぜられる」とある。

(3) 「黒田官兵衛孝高の事」(『武功夜話(前野家文書)』巻七)

「聞いたところ、(黒田)官兵衛の親である宗円(黒田職隆)は、元は播州の人ではなく、和州(大和国)から播州へ流れ来て、黒田の庄に閑居していたが、赤松家内乱の時に、御着城主小寺藤兵衛尉に召し抱えられ、その才能を見込まれて一城の目代に成り上がった」との記述がある。

※ 『武功夜話』は、戦国時代から安土桃山時代頃の尾張国の土豪前野家の動向を記した覚書などを集成した家譜の一種。昭和62(1987)年に『武功夜話』として刊行され、戦国史を覆す資料として注目されるようになった。現在、『武功夜話』は、江戸時代から明治時代まで書き継がれた家伝というのが一般的な見解ではあるが、偽書説を唱える研究者も存在し、成立年代や史料的価値には諸説ある。

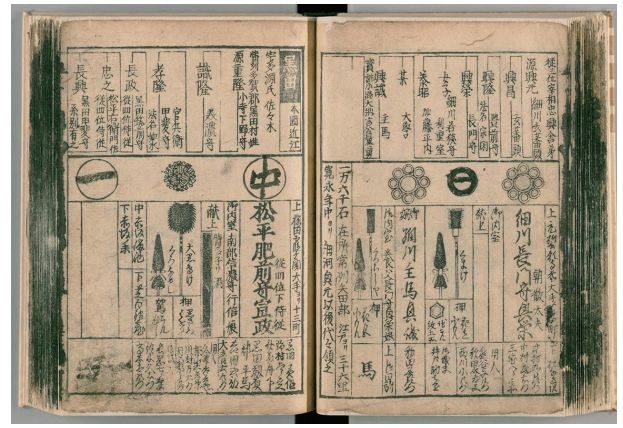
(4) 「遊播遺稿」

莊巖寺を訪れた際、「莊巖寺の僧の案内で、下野守重隆の居城(黒田城)、佐々木塚、花ヶ森塚を訪れ、舟町村を通ると、「おまつ塚」があり、重隆の愛妾「おまつ」が、君を恨んで身を投げたという深い淵がある。」と記している。

※ 「遊播遺稿」は、姫路御着で寛政5(1793)年に発見された重隆・職隆夫人の碑文の真偽を確認させるために、黒田藩が寛政6(1794)年と同8(1796)年の二度にわたって陸目付の牛尾辰之丞久と側筒の喜多岡勇平元賢を密かに播磨に派遣して確かめた際の記録。なお、この調査では、重隆・職隆夫人の碑文は間違いないと報告されている。

(5) 『正風武鑑』、『一統武鑑』、『正徳武鑑』

『武鑑』は、江戸時代に民間で出版された大名や江戸幕府役人の氏名・石高・俸給・家紋などを記した紳士録で、ほぼ毎年発行された。このうちの、宝永5(1708)年発行の『正風武鑑』に「本国近江、播州多賀郡黒田村姓」、宝永7(1710)年発行の『一統武鑑』に「播磨多賀郡黒田村之姓」、正徳4(1714)年発行の『正徳武鑑』に「本国近江、播州多賀郡黒田村姓」とある。

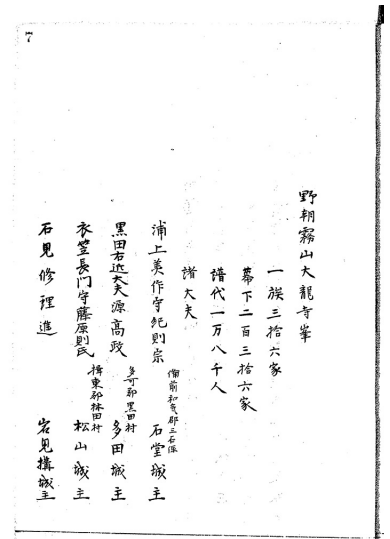


『正徳武鑑』
(国立国会図書館所蔵)

(6) 「荘厳寺本黒田家略系図」(前出史料2)

(7) 「小寺氏系口(図)・黒田氏系図」(個人蔵)

系図の重隆の部分に、「伝曰、下野守重隆は、初めは播州多可郡の庄内を領して居住す。黒田村と称す。四方に堀や土堤のある屋敷があったと、今(正徳4(1714)年)から40年以上前に、この村の古老が話した」とある。



「赤松系図」(部分)
(東京大学史料編纂所所蔵)

(8) 「赤松系図」(原蔵赤松豊右衛門、東京大学史料編纂所)

元和2(1618)年の奥付を有する系図で、赤松政則の重臣として、「播磨国多可郡黒田村多田城主 黒田右近大夫源高政」、次代の赤松政村の諸大夫として「御着城主黒田下野守源重隆」、さらに次代の赤松義祐の代の諸大夫のひとりとして「御着城主小寺伊賀守政職」、その下の諸大夫として「姫山城主小寺美濃守職隆及び倅官兵衛尉孝隆(同別府一郷住)」とある。

(9) その他、橋本政次が『姫路城史・上巻』に引用した、「村翁夜話集」には、「重隆もと多可郡黒田村に住す」とあり、「姫路代々城主」、「播州姫路城主代々記」、「姫路山集記」「赤松諸家大系図」にも、「職隆多可郡黒田村に生まれる」とある。史料確認はできていない。

4 黒田官兵衛や黒田氏が多可郡黒田村出自とする研究やそれを紹介した最近の書籍

(1) 『黒田庄町史』(昭和47(1972)年)、『西脇市史・本篇』(昭和58(1983)年)

昭和47(1972)年に刊行された『黒田庄町史』で、黒田区有文書の「黒田氏系図」や「比延氏系図」を比較検討して、黒田氏及び黒田官兵衛が黒田庄町出身である説が発表された。

また、昭和 58（1983）年に刊行された『西脇市史・本篇』でも、『黒田庄町史』の記述を紹介している。

(2) 播磨黒田氏研究会（鈴木幸治氏）（平成 23（2011）年）

「莊巖寺本黒田家略系図」、「播磨古事」の研究を深め、黒田氏及び黒田官兵衛の西脇市黒田庄町黒田出生説を積極的に発信されている（ホームページ「播磨黒田氏黒田官兵衛」）。

また、多可郡黒田村出自説を一般向けに比較的詳しく紹介した最近の書籍には下記のものがある。

横田武子「黒田家先祖探しの旅—姫路心光寺の発見」

播磨学研究所編『姫路城主「名家のルーツ」を探る』

神戸新聞総合出版センター 平成 24（2012）年 7 月

本山一城「黒田二十四騎のドラマ」

播磨学研究所編『稀代の軍師—黒田官兵衛』

神戸新聞総合出版センター 平成 20（2008）年 4 月

5 官兵衛及び黒田氏ゆかりの伝承地

(1) 黒田城

黒田城は、稲荷神社がある比高約 40 m の半独立山上と考えられるが、遺構は、帯曲輪、^{くるわ たてぼり ほりそこみち} 塹堀、堀底道とも見える不明確な地形が見られるのみである。山頂は 2～3 段の平坦地となっているが、神社境内の削平のため、曲輪跡であるかは不明。なお、東へ続く尾根上約 500 m 先の字城山（標高 246 m、平地との比高約 130 m）の尾根上に、土橋状遺構があり、周辺は曲輪削平途中ともみえる地形があるがよくわからない。また、この東の標高 313 m ピークには、明確に削平された箇所があり、見張台ともみえるが、雨乞場、護摩焚場の可能性もある。



黒田城跡全景



黒田城跡山頂

(2) 多田城（多田構居）

多田城は黒田城と館と詰城の関係にあり、両者の間は約 600 m ある。多田城は『播磨鑑』では多田構居と記された平地城館である。加古川を望む段丘端に築かれており、付近は「^{かま}構江」と呼ばれている。埋蔵文化財としての名称は「黒田構江遺跡」。平成 7（1995）年に住宅建設にともなって一部の発掘調査が行われ、堀跡や建物跡が検出されている。また、「小寺氏系図（図）・黒田氏系図」（前出、個人蔵）の重隆の記事として、「伝曰、下野守重隆は、初めは播州多可郡の庄内を領して居住す。黒田村と称す。四方に堀や土堤のある屋敷があったと、今（正徳 4（1714）年）から 40 年以上前にこの村の古老が話した」とある。この屋敷のことが、多田城のことであろう。



多田城跡の現状



多田城跡(黒田構江遺跡)発掘調査状況

(3) 兵主神社

延喜式内社で、兵庫県指定文化財の大規模な茅葺き拝殿は、棟札によって天正19(1591)年の改築であることがわかる。

この拝殿は、三木合戦の羽柴秀吉が戦勝祈願成就のために臣下の黒田官兵衛に奉納させた奉納金により改築されたと伝えられている。また、戦勝祈願のために灯明田を寄進したとも伝えられている。



兵主神社拝殿(兵庫県指定文化財)



太閤の腰掛石

(4) 太閤の腰掛石

黒田庄町岡の極楽寺の北側にある。秀吉が三木城を攻めた時に、大志野に陣をとって、この石に腰かけて采配を行い、兵主神社に戦勝を祈願して、灯明田を寄進したという伝承が伝えられている。

(5) 莊嚴寺(「莊嚴寺本黒田家略系図」所蔵)

莊嚴寺は法道仙人の開基を伝える真言宗の古刹。木造多宝塔は、江戸時代前期の建立で、兵庫県の指定文化財。本堂も同時期の大規模な五間堂。かつて鬼追いや田遊びの予祝行事を行っていた名残の鬼面や用具が多数残されている。秋の紅葉が見事である。



莊嚴寺

(6) 松ヶ瀬

多田城が攻められたときに、家老が若い官兵衛と母を加古川を渡って逃がす時に、母は溺死し、官兵衛は姫路へ逃れたという伝承にもとづく。母が於松という名であったため、この場所を「松ヶ瀬」という。現在も松ヶ瀬の小字名が残る。



松ヶ瀬付近の景観

(7) ^{うば ふところ}姥が懐

『播磨古事』に記載された伝承によると、多田城に付随する邸宅跡と伝える。遺称地に生誕の地の碑が建てられている。



「姥が懐」に建つ生誕地の碑

ゆかりの伝承地の位置



平成25年8月
西脇市「官兵衛の里」推進協議会